

幼年層向け漆工品の提案

A2201303 池田 光

研究の背景

近年、漆工品の購買数は慢性的に減少の傾向をみせているが、その原因としては、生活の洋風化による生活様式の変化、また大量生産・大量消費の時代を経た事が挙げられる。従来、漆に限らず日本の工芸品は家内の年長者から伝承されてきた事で守られてきた経緯もあった。しかし、近年は世帯分離によりその機会も失われつつある。しかし、その一方では、現在の個人消費に対する傾向として価格では測れない体験的・心理的な充足を重要視する声も多く耳にするようになった。消費者の求めるものが、量的充足から質的充足へと変化していったと思われる。また、質の高い漆工芸品も世界的に注目されてきている。しかし、若年層にとってはいまだ「漆」が馴染みの薄いものに変わりはない。漆工産業の新たな展開を図るためには、広い世代に漆という素材を知ってもらうこともまた、不可欠であると考えられる。

研究の目的

- ・上記の背景をもとに、幼い頃から漆という素材に触れる機会を作り、より身近な存在に感じてもらうため、幼年層向けの漆工品を提案したい。
- ・幼年期から漆工品に触れる機会を作り、漆という素材を子世代、また親世代にも身近に感じてもらう。
- ・「子ども向けの漆製品」という新しい漆工品の在り方を提案する。

研究のプロセス

1. アイデアスケッチ・デザイン決定

- ・市場調査
- ・日本文化・行事の調査
- ・玩具の調査・研究（郷土・北欧玩具の調査）
- ・おもちゃインストラクター養成講座受講（おもちゃインストラクター資格取得）
- ・幼児に対するおもちゃの考え方・展開
- ・技法についての研究・考察

2. 木地制作

- ・玩具の構造・素材の検討
- ・木地切り出し・接着・製材

3. 漆工程

- ・木地かため
- ・擦り錆
- ・擦り漆（数回）
- ・絵付け

成果物

日本の四季・行事について学べる漆玩具。（お椀…4個 ピース…24個）

四つのおわんに、四季を連想させるモチーフが描かれたピースを振り分けることで、遊びの中で四季の植物・日本の文化などを知ってもらうことがねらい。遊びの中でコミュニケーションが生まれるかどうか、またルールを変えて遊ぶことができるかという点を重視した。



木地制作



かため



擦り錆



擦り漆



絵付け

考察・感想

循環型社会の中で再び注目を集めている“漆”という素材。食器など従来の製品だけではなく、より若い世代が親しむことのできる漆工品は何か？と考えたとき、真っ先に思い浮かんだのは玩具であった。

漆製品というと、高級であり、年配者向けであるという印象が強いものである。高級品だから子供に持たせるのは不安。扱いも難しそう。そんなイメージが先行してしまうのだろうか、漆を用いた子供用の製品はあまりに少ない。そんな背景から、この玩具を提案することによって、「子どもに持たせるのが不安」ではなく、「質が良く、子どもに安心して持たせられるもの」というイメージを人々に与えることが出来ればと思う。

今回、玩具を制作するにあたって、おもちゃインストラクター養成講座を受講した。これにより玩具への理解がよりいっそう深まり、大きな成果を得ることが出来た。どのような玩具がより多くの「遊び」と「学び」を生むのか。単なる一過性の製品ではなく、世代を超えて受け継がれてきた漆工品のように、長く受け継がれていくような玩具が普及すればよいと感じる。

制作の反省点としては、一つの玩具に様々な要素を盛り込んだために、デザインの決定に時間が掛かってしまったことが挙げられる。時間配分がうまくいかず慌ただしくなってしまったが、熟考した末に完成したデザインが製品として完成していく喜びは、何物にも代えがたいものであった。